

伐採前のかき起しでいろいろな樹種を更新させる

北海道本来の天然林は、多様性が高く、公益的機能に優れているばかりでなく、構成樹種の木材価格も高いものです。この林を伐採した後に“かき起し”（ブルドーザやバックホウなどの大型機械で地表のササを剥ぎ取ること）を行うと、カンパ類のような先駆樹種の単純林になる場合がほとんどです。本来の樹種構成をなるべく変えずにかき起しにより更新を図るためには、かき起しを上木を伐採する前に樹冠下で行う（写真-1）ことが有効であることがわかりました。その際、かき起す場所の周囲にカンパ類の母樹が少ないほど、また相対照度が低いほど更新樹種の多様性は高まります。道北地方では、①ダケカンパの母樹本数が



写真-1 バックホウによる樹冠下でのかき起し

ヘクタール当たり3～5本以下であるが、②相対照度が10%程度である場所で、③目的樹種の豊作年に、④タネの落下時期の直前にかき起すことにより、ダケカンパの更新を抑制しつつ、目的樹種の更新を図ることができることがわかりました（写真-2）。

（立地科）



写真-2 ミズナラ樹冠下で発生したミズナラ実生